

特248

998

民衆文庫

第十五篇

小野賢一郎述

やまもの話

財団法人 社會教育協會



始



特248
998



話ののもきや

述郎一賢野小



庫文衆民

篇五十第



會協育教會社

目次

やきもの話……………一

珍重がられる初期の作品……………二

無限の興を唆る妖火……………五

兒童の粘土細工……………六

手軽に出来る樂焼……………八

家庭の趣味の向上……………一

碧空を思はせる青磁……………一三

明月の茶碗……………一七

繪 高麗……………二二

やきものに惚れる話……………二六



やきものの話

小野賢一郎

こゝに焼物といふのは、陶器、磁器、硬質のもの、軟質のもの、それらを總て一括して呼ぶ。

焼物の鑑賞といふことが、近年大變にやかましくなつて來た。

一體、人間の生活の中に取り入れられる身の圍りのものを見渡して、何が一番關係が深いか、恩恵を蒙つて居るかといふやうなことを考へて見る。或は水といひ、或は澱粉といひ、何々彼々といふ。また學者によつては木材だといふ。成る程、家屋にしろ、什器にしろ、乃至燃料にしろ、我々の日常生活に木材が深い關係を持つて居ることは争はれない。

二
そんな意味からいつて焼物も非常に交渉の多い一つであることを言ひ切れる。三度の食器をはじめとして、その他茶器の類から灰皿に至るまで悉くがこれヤキモノである。

珍重がられる初期の作品

|| 大名の補助で營まれてゐた窯場

日本は陶器の現はれることが遅かつた。(土器は別として)木材から作られる漆器が先づ發達したのである。

焼物が輸入され、完全に日本のものとして取入れられたのは瀬戸の藤四郎頃であらう。支那や朝鮮にいつて、代々の名工が非常な苦心をして技術を學んだが良いものは將軍や大名の道具となり窯場は皆大名の補助によつて營まれて居た。民間一般的になつたのはズツと後のことこのやうである。

陶器が始めて渡つて來た頃は、將軍は戰國の餘波でもう分け與へる土地もなく、いはゆる名物と稱してこの焼物を一國一城に代へて部下へ取らせたといふ程珍らしがられたものである。今日名物或は大名物といつて、何萬金何十萬金に代へられる物は、成る程品もたしかに良い、しかしそれ程物質的に價値づけられる根柢はといへば、その一國一城の歴史を買ふわけなのである。名物、名品といはれるものも、焼物の本質からいつたら、實は支那の純然たる日常雜器に他ならぬものだらうが、それが珍しがられるのは、勳章としてのその歴史である。だから武勳とか歴史とかいふものを取除いたら、今日の日常雜器にも大名物、名器の類に肩をならべ、迫り得るものが多いといつていゝ。

今日陶器の鑑賞が非常に盛んになつて、或はギリシヤとか、ベルシヤ、エジプト、フランスあたりの古い物、それから支那や朝鮮の物などがどしどし日本へ輸入され、

また、く間にそれが消化されてなほ品不足を告げるといふ風に歓迎されて居る。また民間に於ても工藝に對する目が大衆的に開けて、例へば教養ある奥様方はコーヒーや番茶の茶碗から、播鉢、どんぶりの類を選ぶにも工藝的價値のあるものを求めやうとされるといふ傾向になつて來た。また一方住宅から日常の暮し萬端にいはゆる文化的的のものが取入れられて、その焼物の持つ形、圖案、色彩などが、自分で圖を引いて建てた家に適はしいものを得やうとするといつた風もある。

また一方に、徳川の末期から明治の初期に掛けて、無名の職工が藝術的意識は無いながらも作つた焼物の中に、今日見ると何ともいへぬ自由さがあり、また圖案にしても非常に豁達で、工藝の本質からいつて充分に價値ある物を見出して、それを大名物同様に鑑賞する人もある。例へば行燈の油皿だとか、宿場の居酒屋で使つて居た餅の煮びたしなどを盛る「馬の目皿」のやうなものである。その當時は十文か廿文のものが今日では堂々たる應接室の掛額となり、數十金で賣買されるのがある。

無限の興を唆る妖火

|| 私のいふ「窯中壯嚴淨土」の美觀

アマチュアにして、自ら焼いて楽しむといふことも非常に盛んになつて來た。昔は大名の「お庭焼」として贅澤なものとされ、または一窯焼そこなへば一族滅ぶとまでいはれた焼物、それを今日工藝に熱心な青年や或は志ある紳士たちは窯を築いて熱心に研究して居る。これは一つには運送の便が開けたので、昔と違つて焼物の材料と燃料などが遠隔の地からも容易に取よせられるやうになつたためである。

焼物を自ら試みる楽しみは到底一朝一夕にはいひ盡せぬ。それは焼く人のみか知るところの神秘的な楽しみであつて、私はその神秘的な境地を「窯中壯嚴淨土」と稱して居る。火の洗禮を受けた土、礦物と化合せんとする土の美しさは幾百萬のダイヤを集めて

もその妖光には比べられぬ。しかもそれに加へてその日の天候、風壓による神秘、焔の渦の旋回の度合——これらが良き意味で一致して、そこに名器を生み出すか互礫を生み出すかと決定する。この神秘境は到底二一天作の五の理合では解決できぬ。そこに無限の興味と藝術的昂奮がある。この焼成及び鑑賞に就いては小冊子では述べ盡せぬ。私は近く一本にまとめようと思つて居る。

児童の粘土細工

|| 優秀な作は焼いて保存したい

學校と焼物について、かつて所感を述べたことがある。私は常に児童の手工品を見また手工の實際を見て遺憾に思ふことは、粘土細工に恒久的生命のないといふことである。授業が済めば児童が丹精して作った粘土細工を、一まとめにして先生がまた元の土に還して了ふ。私はこれを見て、いつでも賽の河原の比喻を思ふ。幼きもの達が

丹精して積んだ小石を片端から鬼が崩して行くといふ話——何だかそんな感じを止めることができぬ。

児童の製作品全部とはいはぬが、せめて優秀なものだけでも恒久的生命を與へることができたら、どんなに楽しいものであらうか。また、児童のこの製作品が童心藝術として堂々百年千年前の名工の作った焼物の中に伍して耻かしくない——それどころか彼等先人に見られぬ明るい光彩を放つもの、少くないものが得られたらどうか——斷じて得られると思ふがドウであらう。

児童の粘土細工に恒久的生命を與へるには、ブロンズにするか、焼物にするかである。ブロンズも無論面白い、しかしこれには相當の費用を要する。その點へ行くと焼物は割合に簡單で、廉價である。殊に焼物の優れた點は児童の作品そのまゝを殘すことのできることである。いふまでもなくブロンズは作品の複製である。しかるに焼物にすれば製作そのものを——指紋までもそのまゝに、作り出された生命をそつくりと

八
残すことができる。またブロンズと違つて兒童にもできるといふことも焼物の長所である。方法としては樂燒の方法を應用するのが一番簡單である。

手輕に出来る樂燒

|| その仕上げまでの心得二三

朝顔鉢二個、七輪、餅やきのあみ、煉瓦少數、これで小さいのなら焼くこともできる。しかしこれは家庭でやることで、學校でやるよりも燃料(木炭)が(品物が少數である丈けに)高くつく。

學校で兒童の優秀な作品を五十、百とまとめて焼けば石炭や薪などで非常に安くできる。窯は煉瓦や土などでつくる。専門家の意見を聞く必要もあらうが、大體瓦窯の小さいのを築く考であればよい。東京市内外の小學校でやつて居るのは、多く一坪以内の窯かと思ふ。

焼くには、粘土手工をやるときに特に次のやうな注意が要る。

粘土に砂利、藁などの混り物のないこと。

よく捏ねて、空氣の入つた間隙があつてはならぬこと。(空氣が入つて居れば弾ける)

兒童の作る動物の四肢、人形の手足などの附根を丈夫にして置くこと。(間隔のないやうに)

兒童に注意を與へる要預は以上のやうなことでよろしい。

粘土ができ上つたら太陽で乾かす。それも始めのうちには陰干しにする。水分が無くなりかけたら天日に直接さらす。かうして全く水分が無くなるまで乾かす。太陽の廻るにつれてそれらの手工品もだん／＼廻して行く必要がある。さうしないと歪む。乾燥し切つたら素燒にかゝる。

素焼は始めほどと低火度にし、次第に火熱を上げて、中の物體が赤く焼けて透き通るやうになるまで焼く。それから次第に火を落す。そして冷めるのを待つて取出す。

すでにそれだけでも恒久的生命を與へられたものである。上古の土器すら數千年の今日完全に發掘されるのを見ても、素焼が如何に生きる力を持つたか判る。だからそのまゝでも結構である。

が、更に泥繪具で兒童に色彩を施させるのも興味があらう。それから更に完全を期するならば、釉薬を掛けて焼く。これができたら完全なる樂焼——即ち申分のない工藝品を得る譯である。これも素焼と大同小異で、ガラスと同様の釉薬、または色薬を掛けて焼けばいゝのである。

家庭の趣味の向上

日用品の上にも盛りたい藝術味

考へると、子供のときから焼物に興味と理解を持たすことは教育上からいつても必要ではあるまいか。

焼物は一山百文の物でも、始め土を山から取るときから、焼上げ、荷造りして送るまでに四十二の分業になつて居る。前に述べた樂焼はそれ程たいしたものではなくとも、とにかく出來上るまでにいろ／＼の障害もあり、同時に子供は子供の藝術的昂奮を起すにちがひない。

少年時代から身邊にある日用雜器の焼物に對して、よき理解と興味を持ち、焼物を愛撫し、焼物の美しさを感得るといふことは、子供自身幸福であり、またこの幸福を子供に與へるのが、いはゆる情操教育ではあるまいか。

私の家で陶器を焼き出してから著しく感じることは、女中や書生が臺所で瀬戸物の壊れる音をさせなくなつたことである。

焼物業者も次第に覺醒して、一般の家庭でどういふものを欲しがつてゐるかといふことに頭を向けるやうになつて來た。また大規模に輸出して居る人たちも不景氣とはいへ販路は海外に廣まつて、輸出品中で焼物は重要な地位を占めるやうになつた。

家庭の主婦の趣味がよくなつて來れば、播鉢やどんぶりに至るまでいゝ趣味のものが現はれて來ると思ふ。なせといふのに、土は同じ土、燃料は同じ燃料、釉薬は同じ釉薬、そして人間の勞力は同じ勞力、そして一つのどんぶりなり播鉢なりができる。その播鉢が臺所の味噌播りの用にもなり、若しいゝ趣味のものなれば堂々と床の間も飾り水盤の代用にもならうといふものである。製造者の側から考へると、同じ勞力と

同じ費用で五十錢に賣れるものと二圓に賣れるものとどちらを選ぶかといふ問題になるのだから、主婦の趣味がよくなりさへすれば、製造家側はどこまでも引上げられてよくなるに決つて居る。

同じ播鉢でも形が不安に見えるか、堅固に安定に見えるか、櫛目も今よりもつと藝術的に面白い線が出ぬものであらうか。また播鉢の外側も白繪土で力強い化粧ができたらどうであらう。こんな播鉢で味噌を播るときの主婦の氣持はどうであらうか。このことは、強ち主婦のみとはいへないかも知れぬ。主人も傳統的に惡趣味に引つられて居るのではあるまいか。

碧空を思はせる青磁

|| 似て非なる惡趣味の「小便青磁」

青磁といへば、昔から貴重なものとして珍重して居る。石川五右衛門が盗んだとい

ふ千鳥の香爐、その史實はどうか知らぬが、京都の博物館にあるのを見れば砧手の青磁である。この外、天龍寺手、七官青磁、いろいろ名がついて居るが、とにかく青磁は貴しとされて居る。

私の趣味からいへば、青磁に對してはいろいろな考もあるが、とにかく火の洗禮を最も強く長く受けて居ることが貴い。大正十二年の大震災の猛火すら、よき青磁を熔かすことはできなかつた。

昔から青磁々々といふので、今でも青磁といへば大變なことに考へるのはまづよしとして、似て非なる青磁を青磁として愛用する人の多いことは苦々しい。私が悪趣味といふのはこのことである。これは、青磁を得るにしても、むやみに安價に得やうとする氣持、そこへ製造家側はつけこんで、似て非なるものを青磁として供給する。かかる製造業者は藝術的良心のない悪趣味の製造家として非難さるべきは勿論である。

る。これらの悪趣味の青磁に對して、我々は「小便青磁」と呼んで居る。便所の朝顔の青磁のことをいふのである。あれは本當の青磁ではない。青磁の假面をつけた化物である。

青磁は「雨過天晴」といひ、また「秘色」と形容されて居る。雨過ぎて後の碧い天を望むやうな色であり、奥深い青さを持つべきである。青磁の壺に水あれば、その水は滾々として泉のやうに噴き出て居るかの感じを持たせる。それが青磁である。小便青磁は果して何を噴き出す感じを持たせるであらうか。我々はさうした青磁の色に接することには鼻持のならぬ氣がする。

小便青磁には、藝術的の何物もなく、技巧も材料もすべてまやかしの物である。敢て主人及び主婦に聞く、これらの小便青磁が茶飲み茶碗となり、灰皿となり、或は香爐となり、或は花瓶となつて、あなた方の身邊に臭氣を放つては居りはしないか。

これらの青磁を見わけることができないといはれ、ばそれまでである。しかしゆるる青磁の名に釣られて小便青磁をつかんで居られぬか。文化の進むにつれて、模倣のみを目的とした斯様な悪趣味は、單り焼物ばかりでなく、織物にも、その他あらゆるものに擴がつて行く。これらを鑑別し、同時に淘汰して悪趣味を我々の生活から驅逐するといふことは、教養ある人々、よき趣味を解する人々によつて行はるべきものであらう。

【附言】 身邊匆忙、豫定の頁数を埋めるまでの筆記の時間のないことを淋しむ。よつて、日頃手記したもの、うちから數篇を選んで附け加へる。これは私事手記のやうであるが又見方によつては陶磁器の觀賞のしかたの説明にならぬとも限るまいと考へたからである。

「明月」の茶わん

畏くも久邇宮様の御殿に、私の焼いた茶碗を持参しましたのは、大正十五年の秋風が立ちそめて空には満月の照りわたる頃でありました。茶碗が焼けたら御覽に入れるといふことをかね／＼申し上げてゐたからであります。

私は震災前、本郷に住んでゐました時も、狭い庭で盛んに焼きました。火柱がカマから立つて家根よりも高くあがつた位で近所の人々はひどく恐れしました。しかし私は萬一火急の場合の用意は十分にして焼いたのです。

震災後町、の中では焼きたくありませんので、荻窪に六百坪ばかりの地所を借りてこゝにカマを築くことにしました。ところが新聞社の仕事で忙しくて、逆も手がつけられませんので、ひま／＼を見て本郷でつかつてゐた組み立窯で焼く位で我慢してゐ

ました。しかし大阪方面へいつた時には、かへりに京都か名古屋在の瀬戸へいつて焼くことにしてゐました。

久邇宮殿下へお目にかけてた薄茶碗はそのやうなわけで瀬戸の在の品野といふところで焼いたのです。うはぐすりまで私がかけて、あとの焼く事だけを老人に頼んで、飛ぶやうにして歸りました。大變心配しましたが四個だけは、どうにか見られるものが出来ました。三十餘個のうちの四個で、あとは皆駄目になつてしまつたのです。

この四つの茶碗を殿下の御覽に供へました。二つは空色のくすりがタツブリかゝつてゐます。くすりの溜つた底部は深碧色です。あとの一つはうすく薬がかゝつてゐます。も一つは土の味を見せたもので、櫛の齒で薄が彫つてあります。

殿下はこのうち二つをお取上げになりました。此二つを御選びになつたには全く私にはまゐつたのであります。なせかと申すに甚だ失禮ですが、殿下の斯ういふ器物をお見わけ遊ばす御眼の高いのに、今更ながら恐れ入つたのです。山田事務官へも申した

ことです。「私が思つてゐた通りです、殿下はうまく御あて遊ばした。殿下の御鑑賞眼は失禮ですが、私の胸にピンと來ました。」と。

即ち殿下は、深碧色の茶碗一個と、櫛の齒の模様のを一個とを手許にお止め下さつたのであります。一つは絢爛といつて、けばくしい方、一つは澁味の勝つた方。一つは大空の朗らかなさまを思はせ一つは土の親しさを思はせますこのお選み方は實に恐れ入つたことです（自分の作品を斯様に形容するのは恥しいことですが、自分自身はさういふ氣持で作つたのです。それを殿下はスツカリ御見ぬき遊ばしたのです。）残りの二個のうち、深碧色と同様なのに、殿下は特別の思召で私のために銘を賜はる事をお許しになりました。

どういふ銘を賜はることか、昔から多くの大茶人や、大宗匠や、大名たちが茶碗に銘をつけることはあつても長き宮殿下が茶碗の銘をおつけ遊ばすといふことは古來稀で、實に尊くかしこい次第、自分は大々々恐れ入つてお待ちしてゐました。

一月経ち二月経ちました。そのうちに先帝様御不例の御事があり、つゞいて世は諒闇となりました。また一月経ち二月経ちました。私も諒闇中ですから御遠慮して宮家へお伺も致しませんでした。

諒闇中の春は、花も淋しくありませんでした。その四月のある日、宮家の事務官からお電話で私に来るやうにとの事でした。早速お伺ひしますと殿下から茶碗の銘を下されたとの御沙汰でした。

謹んでお受けしました。貧しい私の茶碗に、長くも殿下みづから、銘を下されたのであります。外箱の表には「明月」といふ銘、裏には長くも殿下の御雅號「謙堂」と御墨色鮮かに拜されました。

つらく思つて見まするに、この茶碗一個に對しても殿下の御思召のどれ程深いかといふ事が、しみじみ拜察されるのです。即ち御約束遊ばされたことも、先帝様の第二期喪のあけるまではお延しになつたのであります。元來宮様方は、臣民の儀表であ

らせられます。嘗て澄宮殿下が私に童謠を初めて殿下賜になつた時も、私は何事も存せず殿下に御染筆の事を御願ひしたのです。それは違法であり、又例のない事でした。しかし殿下は、一旦御承諾遊ばされたからには必ず御實行になる——即ち殿下が初めて毛筆をとつて御親書なされた「ツキトガン」の御作謠を拜受する事が出来たのであります。

久邇宮殿下も、この茶碗の銘のことを一旦お許になりました以上、必ず御果し遊ばさるゝ。而もその御實行を第二期喪あけに遊ばされたといふことについて、そぞろに奥床しさを感せずにはおられません。も一つは「明月」といふ銘です。私の貧しい茶碗は、いかに圓いとは言へ玲瓏たる明月の名をいたゞき得るものとは、如何にうぬばれても思へません。拜察しまするに、銘をお許し下さつた頃、あの「明月」の頃の御氣持を移されたものでせう。明月の季感を茶碗に賜はつたものでありませう。

御筆蹟は申すも恐れ多いが御見事なもので、王羲之といふ昔の大書家の筆法です。

三二
かつて大宮殿下と妃殿下とおつくりになりました、御先代青蓮院宮の「青蓮歌集」を拜受した事がありますが、御歌は全部妃殿下の御染筆、まことに御見事な筆の匂ひでした。跋文と申してその終の文は大宮殿下の御染筆でしたが、これは王羲之の書體の奥底まで突込んで御研究になつたこと、拜しましたが、その御筆のあとを、今私の貧しい茶碗にも下されたのであります。やきものを焼くもの、身に餘る光榮と感激してゐる次第であります。

繪 高 麗

震災直後——といつても、バラックが稍々復興しかけた頃であつたか、私は繪高麗の大瓶を得た。

その頃、市中を廻つて見ると、焼跡に多くの焼物が轉がつて居るのを、よく見かけた。焼物に興味を持つ私は、その焼けた焼物の破片等にも、心を止めたのであつた。あの大火風の中心は、何千度の高熱であつたか知らないが多くの焼物は火のために釉薬がどろ／＼に流れ、胎土は家の焼石と共に、微塵に碎かれて、肌を日光にさらして居た。殊に陶器商の焼跡では、焼けた器物の一つ／＼のみじめな姿に對して、色々の感興が湧き起るのであつた。

釉薬がどろ／＼解けて、大きな土塊のやうになつたのもあれば、青磁の如きは、な

はその大火熱の中にあつて嚴として溶けず、自分の生れる時の高熱を誇つて居るかのやうに見えるのもあつた。

私が繪高麗の大瓶を見つけたのは、萬世橋近くの雜貨店であつたかと思ふ。何の氣なしに歩いて居ると、支那の雜貨があるから、それを素見して居ると、金山寺の皿を見つけた。他に何か焼物はないかと聞くと、床の下から持ち出したのが、件の大瓶であつた。四つに割れて居たが、主人は火はかゝらなかつたと云ふ。火はかゝらなかつたにしても、四になつたその一部分だけでも、繪高麗特有の肌、紋様を見せて居た。それを買取つて、さて組立て、見ると、實に堂々たる大瓶であつて、高さ三尺もあらうか、支那で穀物でも入れて居たのか、口形胴の縮り方も申し分もない。殊に紋様の素破らしさに至つては、これは今もなほ、これに及ぶべき筆力の偉大な働きを見た事がない。瓶が大きいから、大轆轤の上に乗せて動かしながら、その紋様をつけたと見えて、筆の飛んだ跡が、轆轤の動きと共に面白く見られるのである。

今も考へて居る事であるが、この大瓶に繪つけをした筆は、何んな筆であらうか。なほ疑問を持つて居るのである。あれだけの大きい瓶の素焼の肌にしたつぷりと、ぼた／＼と鐵を喰つて居る所を見れば、筆の穂が強くても長く、且つ又鐵を充分に含むだけの軟らかさも持つて居る——筆は何んな形のものであらうか。今なほ筆の姿を夢に描いたり、又は消したりして居るのである。

やきものにほれる話

二六

いつも荻窪から省電で有楽町まで乗る、そして出勤するのであるが、東京驛か神田驛かで必らず乗かへなければならぬ。私は二三度兩驛で乗かへてみたが、自分でハッキリ意識せずに神田驛で乗換へることにきめてしまった。

ある日、同じ線で同じ社に通ふS君と同車したところ、私は神田驛で下りたけれどもS君は東京驛までいつてしまった。そうして神田驛で乗かへた私の電車に、S君は東京驛から乗り込んだのである。そして私にいつた。「ドウして神田で乗かへるのです。東京驛の方がプラットホームが短かくて餘計に歩かないでいゝんですよ」

私は黙つてゐた。「さうかなア」と思つたゞけであつた。そうしてドウして自分は神田で乗換へるかを自問自答してみた。假りに東京驛で乗りかへることを考へてみた。

さうすると暗いホーム、暗い地下ホーム、暗い待合室——さうだ。東京驛は全然展望がない、神田驛のホームは東も西も一望市街の屋根が見下される。ニコライ堂、國技館、三越——さうだ、私は電車を待つ間にこの展望を愛してゐたのだ。市街の空氣、光線、洗濯屋の物干まで愛し眺めてゐたのだ——といふことを意識した。

爾來相變らず神田驛で乗換へてゐる。高いプラットホームだけに風があたつてひどく寒いには寒いが、私はキツト神田驛のホームを歩く、S君は笑つてゐるかもしれないが、ホームの遠い短い私は私の打算に入らないのである。

○
まことに長い餘談であつたが、私が陶器に對する興味もこんなものである、私は陶器の實質を確かめずして一見惚れてしまふのである、一見イヤになつてしまふのである。

鑑賞の仕方にも人によつていろくのやうだ。一個の陶器が出される。私のやうに

スグ好き嫌ひをキメてかゝる人と、陶器の持つ一つの美しくしき醜さをしらべてから好き嫌ひをキメる人とあるやうだ。鑑賞といふ上からいへば胎土、火度、釉薬の上り、形體、線、いろ／＼に吟味した後、初めて上品であるか下品であるか、或は銘器であるか凡器であるかをキメるのが本當であらう。また、さうあらねばなるまい。しかし、しかし、どういふものか、私は陶器を見た瞬間！私の心は極つてしまふのである、これは私としてもドウともすることの出来ぬことである。神田驛で乗かへることを意識せずしてやつてゐたやうなものである。

○
I氏から私の持つてゐる古陶乃至私の作品について寫眞を求められたが一寸寫眞が出せない——といふのは前申す神田驛乗かへの氣ごゝろで蒐め又は製作したものを出して、大方諸君の同意を得る事が出来るかドウかといふことである自分の樂しみは矢張壺中に在るのかもしれないと、近頃おもひつゞけてゐるからである。

土偶を見る。漢、隋、唐と見る。漢、隋のものには釉薬がない、唐にもないのがある。しかし三彩のかゝつた土偶は美しい。

かつて私は唐の土偶で、三彩はかゝつてゐないが樹下美人の美しい且つ大きな土偶を得た。日本で樹下美人といふのは正倉院の屏風にある唐時代の樹下美人像が、この土偶に似てゐるからであらうが、陶を愛する人、畫家の間で樹下美人といへば此式の土偶であることはスグわかる。私の持つてゐたのは朱が實によく残つてゐて、顔もまた美しくかつた。

明易き唐美人立つ枕上み

こんな句まで作つて手に入れた當座は喜んだものである。一見、朱の美しくしき、顔の美しくしき、線の柔らかさに惚れてしまつたので、ありもしない百金を抛つたのである。ところが、二三日経つとソレが妙に不安になつてきた。即ち美人像を見る快感にかはりはないがこの像が壊れはしないかといふ不安が次第に濃くなつて來たことであ

る。像は正に安定を得て、少しも倒れて破壊するといふやうな不安は、表面に見えな
いが、私の心配は次第に深くなつて、三四日後にはソレを出して置くことが不安にな
つて、とうとう箱の中に入れてしまつた。さうして時たま出して見ることにすら危なく
なつてきた。

「こいつアいけない——」と自分でも諦めて、この像を元へ返すことにした。さうし
て私はいつたことである。

「ドウもこの像を見てゐると不安です。自分にもハツキリ不安な心持になるわけが判
りませんが、兎に角見てゐると壊れさうでなくでなりません。——ドウしたことがと
自分でも不思議に思つてゐますが……私はうまくもない癖に自分で焼くからでせう。
この像には一抹の釉薬もかゝつてゐないといふことが不安なのでせう。胎土のムキ出
しといふことが次第に考へられたからなのでせう。この像を見た瞬間は朱の美しさに
惚れてしまつたのですが、見てゐるうちに釉薬のないことが意識に入り出したのでせ

う。なまじつつか、自分で陶器を造る真似なんかするので、釉薬がかゝつてゐないと、
何だかモロいやうな気がするのでせう。——すみませんが三彩のいゝ物が出たなら取
かへて下さい。」

月餘の後、唐三彩の騎馬人像と取換へることが出来た。これは鮮やかな釉がタツブ
リとかゝつてゐた。硝子釉の釉薬としては柔らかいもので決して堅固なものではない
が、土が焼かれて、釉薬がかゝつてゐるといふことで、私に安心を與へたものか、そ
の後この像に對しては何等不安が起らないのである。但しこの像とてまた三彩だか
らと無條件に惚れたのではない、いろいろの三彩のうちで、この馬の形と騎乗の人の
顔に一見まゐつてしまつたのである。

私といふ男はこんな男である。そこでIさん、私の持つてゐる古陶も百や二百はあ
りませうか、「さうですか」と寫眞をさし出して、果して一般の方の興を惹き得るや
否やといふことです。殊に謂んや、私の小閑、漫興の作品に於てをや。

民衆文庫

第十五篇	第十四篇	第十三篇	第十二篇	第十一篇	第十篇	第九篇	第八篇	第七篇	第六篇	第五篇	第四篇	第三篇	第二篇	第一篇
やきもの話	國産の振興	煙草のの	郷土の藝	御大禮の	曆の知	新兵器と化學戰	米國女子青年團運動	氣象二百年十日	通俗海洋學	魚の生活實際	公共劇の理論と實際	肺結核は斯うすれば治る	紋章の	今上陛下の御聖徳

宮内省御用掛	二荒芳徳氏	伯文博士	沼田賴輔氏	醫學博士	額田豊氏	仲木貞一氏	東京帝大講師	内田惠太郎氏	水産講習所	淺野彦太郎氏	技師	藤原咲平氏	理學博士	片岡重助氏	文部省囑託	陸軍省	理學博士	藤原咲平氏	式部長官公府	伊藤博邦氏	九州帝大教授	小出滿二氏	專賣局參事	涌井直次郎氏	專賣局技師	森澤博氏	國産振興會編	小野賢一氏
--------	-------	------	-------	------	------	-------	--------	--------	-------	--------	----	-------	------	-------	-------	-----	------	-------	--------	-------	--------	-------	-------	--------	-------	------	--------	-------

昭和三年五月二日印刷
昭和三年五月五日發行

民衆文庫第十五篇
定價(送料共)十二錢

やきもの話
不許複製

著者 伊藤博邦
發行所 財團法人社會教育協會
小松謙助
東京市小石川區白山御殿町百廿七番地
印刷者 下川隆博
東京市神田區美土町七番地

凡社印刷所

發行所

東京市小石川區
白山御殿町二二七

財團法人社會教育協會

電話小石川七五〇九
銀座口區東京二一八三

317
580

事業

- パンフレットと雑誌
 一、社會教育パンフレット(月二回)
 二、民衆文庫(月一回)
 三、月刊雜誌處女の友(一日發行)
 講演會及び展覽會
 一、講演會談話會の開催
 二、講習會の開催
 三、講演會及び展覽會の幹旋
 映畫圖書館
 一、優良映畫の撰擇推奨
 二、フィルムへの貸付
 三、出張映寫
 四、機械及附屬品の取次
 社會教育の研究調査
 一、内外社會教育施設の調査
 二、民衆娛樂の調査研究
 三、青少年の讀物調査及び撰定

役員

會 長	法學博士 男 岩
理事	東大教授 法學博士 小
常務理事	文部省社會教育課長 小
理事	文部省普通學務局長 小
理事	文部省實業學務局長 武
理事	中央氣象臺學士 白
理事	東大教授 醫學博士 守
理事	東京日日新聞取締役 原
理事	東京朝日新聞局長 須
理事	宮内省御用掛 伯 緒
理事	衆議院議員 城
理事	日清製粉會社社長 那
理事	三井物産會社社長 藤
理事	三菱商會事務取締役 守
理事	第一銀行取締役支那人 白
理事	法學博士 岩
監事	明
監事	關
監事	山
監事	岸
監事	田
監事	野
監事	荒
監事	方
監事	戸
監事	元
監事	亮
監事	皓
監事	平
監事	夫
監事	吉
監事	一
監事	治
監事	助
監事	遠
監事	郎
監事	芳
監事	重
監事	謙
監事	範
監事	欽
監事	佑
監事	榮
監事	咲
監事	元
監事	竹
監事	芳
監事	一
監事	梅
監事	之
監事	龍
監事	照
監事	宙
監事	男
監事	吉
監事	助
監事	吉
監事	郎
監事	三
監事	德
監事	虎
監事	亮
監事	皓
監事	平
監事	夫
監事	吉
監事	一
監事	治
監事	助
監事	遠
監事	郎

終

